

『きらきら』における意味探求のプロセスとタイトルの意味

飯島 昭典

## はじめに

「ザーザー」、「もりもり」、「わくわく」などのオノマトペの豊富さは日本語の特徴の一つである。もちろん英語にもオノマトペはあるが、日本語ほど多種多様な表現は見いだせないのではないだろうか。オノマトペはそれだけで日本語らしさを感じさせる。シンシア・カドハタ (Cynthia Kadohata, 1956-) がアジア・太平洋アメリカ文学賞及びニューベリー賞を受賞した『きらきら』 (*Kira-Kira*, 2004)<sup>1</sup> はタイトルの日本語が暗示するようにアメリカでの日系人が経験した事を物語にしたもの。そしてタイトルは主人公のケイティー (Katie) が姉のリン (Lynn) から教わった言葉であり、姉妹の愛を中心とする物語の中で重要な意味を持つ単語となっている。

物語の最終場面で主人公のケイティーは「きらきら」という単語について改めて想像を巡らせている。その場면을引用してみたいと思う。姉のリンを病気で失った後のケイティーの想像である。

Now and then I thought I heard Lynn's lively voice. The cricket sang, "Chirp! Chirp!" but I heard "Kira-kira!" The crows called "Caw! Caw!" and I heard "Kira-kira!" The wind whistled "Whoosh! Whoosh!" and I heard "Kira-kira!" My sister had taught me to look at the world that way, as a place that glitters, as a place where the calls of the crickets and the crows and the wind are everyday occurrences that also happen to be magic. (243-4)

時々リンの生き生きとした声を聞いた気がした。コオロギは「コロコロ」鳴くが、私は「きらきら」と聞いた。カラスは「カーカー」鳴くが私は「きらきら」と聞いた。風は「ヒューヒュー」うなるが私は「きらきら」と聞いた。姉は私に世

界をそう見るように教えた。光る場所みたいに。コオロギやカラスの鳴き声や風の音も、毎日起こる魔法の出来事みたいな場所として。

コオロギ、カラス、風という具体的な事物が光るものを表す「きらきら」という形容詞で表現されている。言わば、具体的事物と想像力の合体がみられる。現実と想像力の合体はテーマに関わるものではないか、という予想が立てられるのである。「きらきら」という単語、具体的事物ではない抽象性を持った形容詞のタイトルに作者の何らかの意図が隠れている、と筆者は考える。

カドハタは、あるインタビューの中で「最初に『きらきら』の名前の代わりに考えていたのは『ぴかぴか』だったし、それは日本語で火花や明るさを意味するものです」(“ The name I originally suggested for *Kira-Kira* was *Pika-Pika*, which in Japanese means sparkling or bright ”(313)と答えており「きらきら」のオノマトペの表す抽象性に思い入れがあった事を伝えている。『きらきら』であれ『ぴかぴか』であれ、具体的事物とそのオノマトペの形容詞という現実と抽象性の両方に関心があったのである<sup>2</sup>。抽象性に関連付けられるのが想像力であるのは、容易に推論できることではないだろうか。先に引用した最終場面のケイティの想像力とも結び付けられる。また別のインタビューでカドハタは、主人公が南部なまりを持っているのは作者が子供の頃そうであった事実と重なると答えている(401)。こうした現実と「主人公が風呂の中で持つジョー・ジョン・アボンドンダララマの空想は自分が子供の頃持っていた夢の男の空想と本当にそっくり」(“ the bathtub fantasy the main character has about Joe-John Abondondalarama was a lot like fantasies I had about my dream guy when I was a child ”)(401)という空想、想像力の合体も作品の特徴である。この点でも最終場面の「きらきら」の描写、具体的事物と抽象性の想像力の合体は重要と考えられる。

本稿の問いは作品の重要な単語である「きらきら」が意味する事は何であるかを明らかにすることである。抽象性を表すこのオノマトペにテーマがどう関わるのか、現実が果たしてどう関わってくるのかを明らかにしたい。

## 1. 現実に向かう想像力と成長

『きらきら』はケイティーが語る物語であり、彼女が見る世界を一人称で描く小説である。大好きな姉のリンとの関係を軸に物語が展開していくと考えていいだろう。姉のリンに教わった「きらきら」という言葉が大好きな、ケイティーの中心的特徴は想像力である。「きらきら」の言葉には関係ないと思われる、綺麗な青空、子犬、子猫、蝶々、色付きのクリネックスなど、気に入ったものは何でもそう呼ぶ。教わった言葉に対する愛着によってこのように色々なものをそう呼ぶのだが、それは教わった相手、リンに対する愛着も大いに関係している。姉を慕っているのがわかるであろう。

そして慕っているだけでなく、ケイティーは姉のリンに守られているのが分かるのが、犬に襲われるエピソードである。トウモロコシ畑で遊んでいたケイティーとリンは犬に襲われる。ズボンに噛みつかれたケイティーは悲鳴をあげるが、リンは犬のしっぽを引っ張って、「逃げて、ケイティー、逃げて」(“Run, Katie, run!”)(4)と妹を逃がし、家から持ってきたホースで水をまき、犬を退散させるという機転で窮地を脱する。このエピソードは肉体的に姉に助けられるケイティーを描いたものであるが、精神的な意味でも姉に助けられているケイティーを表すものである。姉に守られる妹ケイティーの図式は明らかである。

しかし、作品中で姉のリンは命を落とすことになる。それ以前にケイティーの役割、守られる存在という役割が変化するエピソードがある。そしてそれは彼女の想像力と関係がある。ケ

イティーが気に入っているべらべらとはぬいぐるみの事だが、べらべらに話しかけるだけでなく、そのぬいぐるみは、毎日自分が何をしたかケイティーに話してくれる、しゃべるのが好きである、とさえケイティーは考えている。ぬいぐるみというおもちゃに対する感情は、ケイティーの強い想像力を表すものである。魔法の反射の世界に入れるべらべら、『鏡の国のアリス』のアリスと知り合いのべらべらは、ケイティーにとって大切なものであり、これを失う事は考えられない。しかし、ケイティーとべらべらの関係はどうなるのだろうか。次の場面を引用してみたいと思う。

Some nights I liked to put Sam on my little bed so he could sleep with me instead of alone. I did not want the oni — ogres who I knew guarded the gates of hell — to take my brother in the night. I hugged him to me all night. When he was one year old, I remembered something: At some point since he had been born, I had lost Bera-Bera and never even noticed. (58)

時々私は自分の小さいベッドにサムを寝かせるのが好きで、サムを独りにしなかった。鬼が嫌だったから。地獄の門番をしている鬼が夜にサムをさらっていかないように。一晩中サムを抱きしめた。サムが一歳になる頃、私はある事を思い出した。サムが生まれる頃のいつか、私はべらべらを失くしていて、それに気づいてさえいなかった。

この場面でも鬼というケイティーの想像力は表れているが、姉のリンに守られるケイティーにサムを守る役割が加わっているのがわかるであろう。べらべらに対する想像力、自分にとっての友人であるべらべらの想像力は、それを失くす事によって他者を守

るという役割に変化するのである。鬼の想像力は自分に向けられるのではなく、サムという守るべき対象という他者に関連してあらわれる想像力である。想像力の方向は、べらべらの喪失によって自分から他者へと変わったのである。リンが命を落とす前に、ケイティーが経験した変化とは、守る役割を帯びるという事である。リンの病気とケイティーの態度の変化についてウェンディー・ケルハー(Wendy Kelleher)は「病気が進行するにつれて、ケイティーの人生と関係性への理解は深まり、成熟する」(“As the disease progresses, Katie’s understanding of life and relationships deepens and matures”)(450)と述べているが、この変化の前にケイティーはサムとの関係、そして自分のお気に入りのおもちゃの喪失というエピソードによって変化を経験している、と言えるであろう。

リンはケイティーにとって理想の姉であり、ほとんど聖人といっ  
ていいぐらいの尊敬を妹のケイティーから受けている。しかし、  
ケルハーが述べているように、リンの病気が進行するにつれてケ  
イティーのリンへの感情は少しずつ変化していく。リンが寝込む  
ようになった後のケイティーとリンの様子をここで引用してみる。  
牛乳が欲しいと言ったリンはこれを落とし、直後に、今度は水が  
欲しいとケイティーに言う。

“ I want water! ”

I went to the kitchen and came back with water, a soapy  
dishrag, and a towel. I handed her the water without  
comment. Sammy’s eyes were open wide, watching me. I  
cleaned up the rug.

Lynn cried out, “ There’s soap on this water glass! ” She  
flung it to the floor.

I stared at the cup for a moment. Then I whipped around  
“ You’re ruining everything! ” I said. “ We got a new house,

and you're ruining everything! Mom and Dad worked so hard to get this house. You're ruining it!" (182-3)

「水が欲しいのよ」

私は台所に行って水と石鹼水を含ませたふきんとタオルを持ってきた。一言も言わずにリンに水を渡した。サムは目を大きく開いて私を見た。私は絨毯をふいた。

リンは大声をあげた。「この水のグラスには石鹼が入っている」リンはコップを床に投げた。

私はしばらくコップを見てそれからリンを睨んだ。「あなたは全部をめちゃくちゃにしている」私は言った。「新しい家も買った。なのにあなたが全部を駄目にしている。母さんと父さんはこの家を買うのに一生懸命働いた。でもあなたがめちゃくちゃにしている」

ここで表現されているのはもはやケイティーを守るリンではなく、看護されるという守られているリンの姿であり、わがままな聖人とは言えないリンの姿である。そしてケイティー自身もリンに対してはもはや尊敬という感情は抱いていない<sup>3</sup>。リンの病気という現実が、ケイティーにリンの新たな面を見つけさせた、と言っているだろう。リンに守られていたケイティーはリンを守る存在となったのである。サムを守るケイティーの姿は既に述べたが、リンに対しての過大な理想化は失ったケイティーであり、今はリンを守るケイティーである。これはケイティーの成長ともいえる事である。

クリスタ・カマー (Krista Comer) は「カドハタの作品はアジア系アメリカ文学の興味深い研究を移動において提供している」 (“Kadohata's work provides an interesting study of Asian American literature in transition”)(408)と地理的な移動について言及しているが、この移動の問題は地理のみならず精神的な移

動についても当てはめられる。すなわち、ケイティーの何も知らない無垢の時代からリンに対して違う面を発見するようになる、という精神的成熟、成長という心の移動である。リンに対して盲目的に天才だとか誰にでも優しいというケイティーの無垢の感情が、現実を見るようになる。

自分の母親が怒った時に「彼女の柔らかな顔は固くなり、ガラスみたいに何かにぶつかったら粉々になりそうだった」(“ Her soft face turned hard and glasslike, as if it could break into pieces if something hit it ”)(10)と表現するケイティーの想像力、あるいは丸い「フミコおばさん」(Auntie Fumiko)は頭まで丸く「いつかそれを割ってみて何が入っているか見たかった」(“ Someday I planned to knock it over and see what was inside it ”)(37)というようなケイティーの想像力や、先に述べたべらべらに対する想像力は、サムのパロディ、そしてリンが病気になった後は、リンの看護という現実に向かうのである。想像力が中心であったケイティーは成長と共に現実が見えてくるようになる。想像力が現実に向かう方向を変え、それがケイティーの成長と重なるということが分かるのではないだろうか。

## 2. サブキャラクターの働き

第1節ではケイティーの想像力が現実に向かっていく様子を説明したが、ケイティーとリンという主要な登場人物だけでなく、サブキャラクターの働きも作品中で重要である。ケイティーとリンという姉妹の間に入ってくるのは、リンの友達アンバー(Anber)である。仲の良い姉妹にアンバーは性の問題を持ち込んで、リンとアンバーは新たなパートナーとして仲良くなる。リンがキスをしたことや、アンバーもキスをした話などに、キャンプの夜、夢中になる二人である。ケイティーは性の問題にまだ興味がわからず、一人蚊帳の外という感じになる。それゆえ、ケイティ

ーとリンの繋がりを壊すと思えるようなアンバーをケイティーは  
こころよく思っていない。いわばケイティーの考えていた姉妹の  
調和は、アンバーの存在によって壊されてしまった、と言える。  
この調和の破壊、ケイティーとリンの意思の疎通の不十分がアン  
バーの存在によって明らかになる場面がある。ケイティーがキャ  
ンプの夜に、自分の理想の男性、想像の中の男性について真面目  
に語ったが、リンとアンバーの態度、そしてケイティーの感想は  
以下の通りである。

When they finished laughing, I realized they weren't  
laughing at me—they thought they were laughing with me.  
They had thought I was just joking about Joe-John  
Abondondalarama. Lynn hugged me and exclaimed, "I love  
you, Katie!"

Amber said, "You're great! You're the funiest person I  
ever met!"

What could I say? I basked in their praise. I felt pretty  
phony pretending I'd just been kidding, though. I wished  
I had my own friend. (83)

二人が笑い終えたら、私は思った。二人は私を笑っていたん  
じゃなくて、私と一緒に笑っていると思っていたんだ。私は  
ジョー・ジョン・アボンドンダララマについて冗談を言っ  
ていると思っていたんだ。リンは私を抱きしめて叫んだ。「大好  
きよ、ケイティー」

アンバーは言った。「あなたはすごい。あなたは私が出会った  
中で一番面白いわ」

私はなんて言えばいいのだろう。私は褒められるままにして  
いた。だけど冗談を言っているふりをしている自分が本当に  
馬鹿らしかった。私も自分自身の友達が欲しいと思った。

ケイティーは自分の理想の男性について真面目に語ったにもかかわらず、リンとアンバーはそれをまともには考えず、冗談としか思っていない。ここでは妹ケイティーの意図したことがリンには伝わっておらず、分断が見られる。ケイティーの「私も自分自身の友達が欲しい」という願望は、自分の意志が伝わらなかった悲しみと残念から発せられた言葉である。それまでのケイティーとリンの互いに伝達しあう関係は、アンバーというその関係の破壊者によって、変化を生じる。ケイティーが伝達可能な姉妹の調和を乱すアンバーを良く思わないのは当然の事ではないだろうか。

しかし、リンの病気が重くなるとアンバーはリンの元を去っていき、この意思の伝達の破壊者という調和を乱す存在が消える事で、姉妹はまた伝達可能な調和を取り戻す。リンがいよいよこの世を去る直前にケイティーに話しかける「もっと良い成績をとるようにしてね。約束して」(“ You have to try to get better grades. Promise? ”)(195)や「大学に行ってね。約束して」(“ You should go to college. Promise? ”)(196)や「お母さん、お父さん、サムの手伝いを見てね」(“ Take care of Mom and Dad and Sammy ”)(196)という言葉に対してケイティーが「約束する」(“ I promise ”)(196)という返事をしていることは、意志の伝達のはっきりした証拠ではないだろうか。約束をするという事は、強い意味を持つ事であり、きちんと伝わっていなければ、出てこない言葉である。アンバーという調和の破壊要素が去った後は、このように再び伝達が実現してくると言える。伝達が実現するという意味で、姉妹の関係性は調和という現実味を帯びてくる。第1節でリンが病気になった後、ケイティーとリンが言い争う場面を先に引用したが、あの場面でも伝達は出来ているし、後にケイティーはリンをあらためて慕い、懐かしく思っていることを考えるならば、姉妹の調和はとれていると言える<sup>4</sup>。

仕事をする人間にとって雇用主から給料をもらって生活してい

く、というのは普通の事だろう。雇用主に損害を与えるような事をすれば、この平和が崩れるのは、当然の事である。ケイティーの父マサオ(Masao)は、この平和を破り、雇用主であるリンドン(Lyndon)の車を意図的に破壊する。それはサムがリンドンの土地に仕掛けてあった動物用の罠で脚に怪我をしたことへの復讐なのだが、これは当たり前の日常を壊す調和の破壊要素と言っている。

アンバーがケイティーとリンの意思疎通の調和を乱す要素であるとしたら、マサオの行った行動は、日常を乱す調和の破壊である。車の破壊をリンドンに正直に言った結果、養鶏場を解雇されたマサオは、どのような態度をとるだろうか。一緒にいたケイティーの反応がわかるその場面を引用してみたいと思う。

Then when my father stood up, I did too. I saw my father was not intimidated by Mr. Lyndon. And that was how I learned that even when you're very, very wrong, if you apologize, you can still hold yourself with dignity. "Good-bye, Mr. Lyndon," my father said. We walked out.

... Before he started the car, my father said, "I don't ever want you to be afraid to apologize." (235)

父さんが立ちあがって、それから私も立ちあがった。父さんはリンドンさんに怯えていないようだった。そして私はこんな風に学んだ。どんなに悪い事をして、謝りさえすれば、自分の品位は保てるという事を。「さようなら、リンドンさん」と父さんは言って、私たちは歩いて外に出た。

… 車をかける前に父さんは言った。「私は絶対にお前には謝る事を恐れて欲しくないんだ」

車を壊した事は知られていないし、リンドンさんは意地悪だから謝る必要はない(231-2)と言うケイティーの説得にもかかわら

ず、正直に謝罪したマサオは正直に謝る事で自分の品位は保たれる、という教訓を娘に与えた。復讐をして隠したままにするよりも、この行為が貴いのは明らかである<sup>5</sup>。そして娘への教育という観点からもこの行為は望ましい。車の破壊、そして解雇という日常の調和の乱れは、謝罪により職を失う事になるとはいえ、感情の浄化と教育という意味で、調和が回復したとも言える。復讐をして隠したままならば、この調和は得られない。

マサオの仕事は雌雄鑑別士であるが、この雌雄鑑別士の仕事の特徴をエイイチロウ・アズマ (Eiichiro Azuma) は「それは主に季節的な仕事で、普通、年の初めから夏の始めについて行われる。アメリカの田舎のあちこちの養鶏場を頻繁に渡り歩き、この仕事をやる人はこの単調な仕事に従事した」(“ it was largely seasonal work, typically running from the beginning of the year to early summer. Travelling frequently from one hatchery to another in rural America, the practitioners performed this monotonous task ”)(243)と述べている。つまり、リンダンの養鶏場を解雇されたとしてもマサオは、他の養鶏場で働く場所を探せる可能性は十分にあったのである。謝罪によって品位を保つことと娘に教育を与える事の両方を実現する事を考え、また仕事があるという現実を考えたら、マサオの行った行動は十分に価値があると言える。実際、マサオは謝罪の後、ジョージア州の他の養鶏場で職を手に入れている。車の破壊という復讐は、感情の浄化、娘への教育、そして新たな職場という新しい現実に向かっていくのである。

アンバーというケイティとリンの意思疎通の調和の破壊要素が消える事で、再び姉妹の意思疎通は密接なものになり、ケイティとリンの関係性は深まって現実感を回復する。そして復讐という日常の調和を破壊したマサオは、感情の浄化と娘への教育を経験した後、新たな職場という新しい現実を意識がむかう<sup>6</sup>。そして家族も罪の隠し事のない新たな現実を送るようになる。サ

ブキャラクターの調和の破壊要素は、消え去る事や行動の反省等で、やはりケイティーの置かれた立場を現実に向かわせると言えるであろう。

本稿の問は作品中で最も重要な単語「きらきら」の意味する事を明らかにする事であった。このオノマトペの意味がそのまま作品のテーマとなる、と予想を立てた。作品の最後でこの重要な単語が表れてくるが、それを引用してみたいと思う。

I don't think anyone understood as well as I did how badly Lynn had longed to walk along the water the way my family I did that New Year's Day. I hid my tears from my parents. But the water started to make me feel happy again. Here at the sea—especially at the sea—I could hear my sister's voice in the waves: “Kira-kira! Kira-kira!” (244)

新年最初の日、私の家族と私がやっているように、どんなにリンが水に沿って歩きたがっていたかを私が一番よく分かっていた。私は両親から涙を隠した。でも水は私をまた幸せな気持ちにさせ始めた。ここで、特にこの海で、私は姉の声を波の中で聞くことが出来た。「きらきら、きらきら」

死んだ姉の声という架空の声が、波という現実呼び起されている。そしてこの「きらきら」はケイティー達が昼間に海を訪れている事を考えたなら、太陽の光とそれを反射する波を表すオノマトペとも考えられる。現実の反射とリンの声という架空が合わさった場面であり、そして幸せを感じているケイティーである。涙を両親に見せまいとするのは、彼女の強さを表していると考えられる。

第1節では、ケイティーの想像力がべらべらというぬいぐるみを失くす事やリンに対して聖人ではない面を発見する事により、

現実へと向かう事を示した。これが彼女の成長と重なる。第2節では調和の破壊要素であるアンバーという存在が消え去ったり、父が雇い主の車を破壊する、という調和の破壊要素が、謝罪という人間性の強化により消えて、ケイティーの教化や新しい生活の開始の契機となる事を示した。そして状況が現実へと向かっていく。作品中では、現実へと向かうベクトルが重要な意味を持つのである。

「きらきら」という単語は抽象的なオノマトペであるが、ケイティーは最終場面で、架空のリンの声と波に反射する太陽光の現実を合体させて、「きらきら」の単語を結びとして使っている。涙を見せないことは、強い意志の表れであるが、そこに付随して幸せを感じているのは、人生への積極的態度に関係している。「きらきら」という抽象的なオノマトペは、ケイティーの意志で、人生への積極態度を連想させる。想像力と現実の合体により、人生の意味探求への態度を表す単語として「きらきら」は表されている。

カドハタの別の小説『雑草の花』(*Weedflower*, 2006)においてスミコ(Sumiko)とフランク(Frank)という登場人物は「互いに本当にめったに会わないが、ほとんど全ての訪問で彼女たちは、自分たちが驚く何かを発見する」(“ Even though they see each other only rarely, on nearly every visit they learn something that surprises them ”)(311)とアリーソン・ペース・ニールセン(Alleen Pace Nilsen)は述べているが、このめったに会わないという一時的な交流による発見は、ケイティーによる波を聞いてリンの声を思い出すという刹那的な状態による人生の発見とも重なる。発見のモチーフは他作品においても見られる特徴である<sup>7</sup>。ここまでの説明で明らかになったであろう。「きらきら」の単語の意味、それは想像力や架空という実体でないものに現実の意味を見出し、虚からの実現を目指すものと言える。ケイティーの成長に伴うこの発見こそが、この単語の意味であり、作品のテーマである。これが本稿の答である。

女性でありそしてアジア系である、というアメリカ文学においてこれまでは周辺と考えられていたカドハタの作品が、こうして注目されてきたのは我々日本人にとっても喜ばしい事である。東洋の思想に関心を持つ者が、現代アメリカ人作家にはかなりおり、日本文化を紹介しているが、我々日本人の中で、英語で作品を発表するという日本人作家は、今のところほとんど皆無であろう。日本文化とアメリカ文化の邂逅は、こうしたことによっても行われるという将来への希望である。

## 註

1. 以下、シンシア・カドハタ『きらきら』からの引用は、Cynthia Kadohata, *Kira-Kira*, Antheneum Books, 2004年の版に拠る。
2. カドハタが『ぴかぴか』ではなく『きらきら』とした理由にトイレの洗浄剤のコマーシャルで「ぴかぴか」という文句が使われていた事、あるいはアニメ・キャラクターのピカチュウを連想させる事などを挙げているが、こうしたことは一種のユーモアを感じさせる。この作品が死を扱いながらも、ケイティのユーモアを感じさせる部分があるが、作者のこうした態度を反映しているようで興味深い。
3. もちろん、わがままになるリンも、それに反発するケイティも病気が原因になっているのは言うまでもない。しかし、この姉の病気により、ケイティはリンへの新たな認識を得るのである。
4. リンの死後、14章最後で蛾が現れるが、蛾や蝶が死者の魂として日本の『万葉集』などで歌われている。また民間伝承でも死者と結び付けられる。キリスト教においても復活の前兆とされ、この場面の蛾を知らないまでもリンと結び付けているケイティの考え方は理解できる。
5. リンドンを悪者と決めつけるのはしかしながら早計であると思う。従業員が自分の車を意図的に破壊した後、謝罪を受け入れながらも、弁償させる手続きをとるのは、当然の事と考えられる。金を持っている事や貧しい者を使っている事だけで、悪者とする事は出来ない。
6. マサオ夫婦は協力関係にあるが、移住に際してミシェル・J・アンダーソン(Michelle J. Anderson)は「移住そのもののストレスに関連して、この国の少数派人種への差別、貧困、失業、そして混みあった生活環境により、夫が暴力的になる機会が高まる」(“Stresses associated with migration itself,

discrimination against racial minorities in this country, poverty, unemployment, and crowded living conditions heighten the chance that a husband will become abusive ”)(1403-4)と述べている。

7. この作品はアメリカ文学の特徴であるイニシエーション物語の類型である。ケイティーは傷つく経験をしてその後、人生に対して新たな見方を持つようになる。

引用・参考文献

- Anderson, Michelle J. . “ A License to Abuse: The Impact of Conditional Status on Female Immigrants. ” *The Yale Law Journal* , Apr., 1993, Vol. 102, No. 6 (Apr., 1993), <https://www.jstor.org/stable/796973>, pp. 1401-30.
- Azuma, Eiichiro. “ Race, Citizenship, and the "Science of Chick Sexing": The Politics of Racial Identity among Japanese Americans. ” *Pacific Historical Review* , Vol. 78, No. 2 (May 2009), <https://www.jstor.org/stable/10.1525/phr.2009.78.2.242>, pp. 242-75.
- Comer, Krista. “ Western Literature at Century's End: Sketches in Generation X, Los Angeles, and the Post Civil Rights Novel. ” *Pacific Historical Review* , Vol. 72, No. 3 (August 2003), <https://www.jstor.org/stable/10.1525/phr.2003.72.3.405>, pp. 405-13.
- Kadohata, Cynthia. *Kira-Kira*. Atheneum Books, 2004.
- — — . “ Interview with Cynthia Kadohata. ” *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, Vol. 50, No. 4 (Dec., 2006 - Jan., 2007), <https://www.jstor.org/stable/40013756>, pp. 312-3.
- Kelleher, Wendy. “Review. ” *Journal of Adolescent & Adult Literacy* , Feb., 2006, Vol. 49, No. 5 (Feb., 2006), <https://www.jstor.org/stable/40012810>, pp. 449-50.
- Mitchell Judith. “ Children's Books: 2005 U.S. Children's Literature Award Winners. ” *The Reading Teacher* , Dec., 2005 - Jan., 2006, Vol. 59, No. 4 (Dec., 2005 - Jan., 2006), <https://www.jstor.org/stable/20204365>, pp. 400-8.
- Nilsen, Alleen Pace. “ Review. ” *Journal of Adolescent & Adult*

*Literacy* , Dec., 2006 - Jan., 2007, Vol. 50, No. 4 (Dec., 2006 - Jan., 2007), <https://www.jstor.org/stable/40013749>, pp. 310-1.

Racne-Roney, Judith. " Jump-Starting Language and Schema for English-Language Learners: Teacher-Composed Digital Jumpstarts for Academic Reading. " *Journal of Adolescent & Adult Literacy* , Feb., 2010, Vol. 53, No. 5 (Feb., 2010), <https://www.jstor.org/stable/25614572>, pp. 386-95.